タコゾネスですが何か？

深海提督

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、女性はインクリング達の敵である「タコゾネス」として目を覚ました。

しかしそこは、タコ達が地上に溢れ出たＳｐｌａｔｏｏｎ２の世界ではなく、オオデンチナマズが連れ去られたばかりの初代Ｓｐｌａｔｏｏｎの世界だった。

これは、タコゾネスになっていた女性が３人のイカ達と共に、Ｓｐｌａｔｏｏｎの世界を自由気ままに生活していく物語である。

更新は完全に不定期です。

目次

1　初代からタコですが何か？ ―― 1
2　ヒーローから狙われるタコ ―― 23
3　ボーイをからかうタコ ―― 38
4　お忍びの将軍様 ―― 48

1　初代からタコですが何か？

突然だが、皆さんは「タコゾネス」という生物をご存知だろうか。
…え？どうしていきなりそんな質問をしてきてんだこのタコ野郎…だって？
まぁ、普通はそう思いますよね。
ではいきなりですが、まずは私が立っているこの世界について説明しましょう。

ここは地球、私達人間が支配していた惑星です。
しかし悲しい事に、海面上昇により私達人類は滅んでしまいました。
え？その言い方だとなんで人間であるお前はこうして話してんだ？このタコ野郎…ですって？
まぁ最後まで聞いて下さい……

海面上昇により人類が全滅すると、新しい生物が地上を支配しました。
そう、海に棲んでいた生き物です。
そして何やかんや有りながら進化を繰り返した結果、この地球上に多く生息し、特徴的な生物が誕生しました。
それが、人気ゲーム「Ｓｐｌａｔｏｏｎ」の主人公こと「インクリング」である。略してイカである。

そう、ここはＳｐｌａｔｏｏｎの世界なのです。

私もＳｐｌａｔｏｏｎのプレイヤーで、Ｓランクにも行かないクソザコナメクジでしたが、Ａランク帯をうろちょろする位にはやりました。
そして、私はそのＳｐｌａｔｏｏｎの最初のチュートリアルである、名前の分からない所に居ます。

では次に、最初に問いかけた「タコゾネス」について、説明します。
Ｓｐｌａｔｏｏｎの世界には、インクリングの他にも多くの海産物が生息しています。一応海洋生物以外にも鳥とか居ますけど……
クラゲにウニ、カブトガニにイソギンチャク、後エビフライ……まぁ大半がクラゲを占めてるんだけどね…
とまぁ色々居ますが、これらの海洋生物以外にも、裏の世界にはとある種族が多く蔓延っています。
それが、主人公の敵であるオクタリアンである。略してタコである。
１００年前に１年間行われていた大ナワバリバトルという、オクタリアンとインクリング含むその他生物によるナワバリバトルという名の戦争が起きました。
しかしオクタリアンは敗北してしまい、地上から人類が残した機械を改良し、地下へとナワバリを移す事になってしまいました。
オクタリアンにはいくつもの個体が存在し、種類によってはインクの上を移動する機械に乗っているタコや、空を飛んでいる者もいます。
その中には、イカのように人型に擬態する事ができる者も存在する。人型に擬態する事ができる以外にも、ブキを装備したり、センプクしたり、スーパージャンプもする事ができる。

このように、イカとほぼ同じ性能を持つ個体を「タコゾネス」と呼びます。
そうです。最初に尋ねたタコゾネスとは、イカの敵であるオクタリアンの1種の事なのです。
そのタコゾネスの外見について説明すると……
・頭の髪の毛のような部分は、茹で上がった赤いタコ足のような見た目をしていて、所々に吸盤が付いている。
・肌はほんのりピンクがかった肌色
・アタマに銀色の暗視ゴーグルのようなスコープを顔に掛けている。
・フクは黒いスパッツのような素材で出来たフクに、銀色のプロテクターを付けていて、下半身もスパッツのようなズボンを履いている。
・クツは耐水性の高い素材で出来ていて、靴紐タイプ。
・ブキにはスプラシューターの性能を少し良くしたオクタシューターを装備し、背中にインクタンクを背負っている。
とまぁ、こんな感じにイカとは少し見た目が異なっています。
え?なんでそんなに事細かに説明できるだって?
あぁそれは……

地面に落ちていたカーブミラーに映った自分の姿をまんま説明したからである…

時は遡り1時間前…

「エエエエエエエエエエエエエエ!?」

ふと目が覚めると、私はタコゾネスになってました…

どうしてこうなったのか、何故私がＳｐｌａｔｏｏｎの世界に居るのかなど、焦りながらも脳みそを回転させると、確かな事が2つだけ思い出せた。

1つ目は、私は元は人間で、ある程度は人間だった頃の記憶があり、新作のＳｐｌａｔｏｏｎ2を遊ぶ為のＳｗｉｔｃｈを買えなくて憂さ晴らしに初代であるＳｐｌａｔｏｏｎを遊んでいた記憶だ。

２つ目はあまりゲームの成績はそこまで良くなかった事だ。ガチマッチのランクはずっとAランク帯をずっと行ったり来たりを繰り返していた。この事実は正直思い出したくなかった……

それ以外の記憶は特に覚えてなく、残念な事に親も友達も、自分の名前や歳すらも思い出せなかった。

しかしＳｐｌａｔｏｏｎの記憶自体はある為、そこだけは有難かった。

そして現在に戻り、自分自身の体であるタコゾネスの体を徹底的に調べてみた。

Ｓｐｌａｔｏｏｎの世界では、バトルがマトモにできなければ、イカしたイカとして生きていけないと言っても過言ではない程ナワバリバトルが激化している。

その為、自分自身の戦闘能力を少しでも知っておかないとあっという間にイカに殺られてしまうかもしれないのだ。

簡単にヤラレチャッタしたくないのである。

まずは自分自身の体をひたすら調べてみたのだが、体はやはり女体で、肉体年齢は大

体16歳くらいだった。
次に手に持っているオクタシューターのトリガーに指を掛けると、銃口から紫色のインクが飛び出してきた。
正確に言えばイカたちの紫色のインクとは違い、タコ色と呼ばれるインクらしいのだが、ほぼ見分けが付かない為、紫インクと呼んでおく。
操作性はゲームと同じ感覚で、トリガーを押している間はインクが連続して発射された。
しばらく撃ち続け、背中のタンクのインクが無くなると、プスップスッと少ししかインクが出てこなくなった。
やはりゲームと同じように、インク切れになるとブキからインクが殆ど出なくなるようだ。
次にインクを回復される為にオクタシューターから撃ち出されたインクの上に立ち、水の中に潜るように意識すると、不思議と勝手に体がヒトからタコになり、インクの中をセンプクし、泳いでいった。
インクの中は水の中とあまり変わらず、視界も良好で、息苦しさは全くなかった。
インクの中にセンプクしていると、徐々にインクタンクの中にインクが補充されていき、しばらくするとタンクの中いっぱいに補充された。

なるほど、基本的な動きは意識すれば体が勝手に変化してくれる。それさえ分かれば逃げながらインクを塗るくらいは出来そうね…

一通りこの体の動きに慣れると、私はこのチュートリアルの道をただひたすら進んで行った。

空は満点の青空で、この光景がまさか人類が滅亡した後だとは思えないほど平和な景色が広がっていた。

そして、この道をただひたすら道なりに進んで行き、壁の上に登っていくと、遂にハイカラシティへと飛んでいくジャンプポイントにたどり着いた。

どうしてこのＳｐｌａｔｏｏｎの世界に来てしまったかは分からないが、来てしまったからには死なない程度にこの世界を楽しんでいこうと考えると、ジャンプポイントにセンプクし、紫色のインクを飛ばしながら勢いよく飛んで行った。

所で…これどうやって制御するの？

「おーい、そろそろ始めるぞー」

ここはデカライン高架下。初めてバトルする「わかば」なイカから、ガチガチにイカしたイカまでやってくる定番のナワバリバトルスポットだ。

イカの来ない日は無いと言われる程人気のこの場所に、今日も2チームに分かれたイカが集まっていた。

今回は初心者同士が集まって作られた紫チームと、試合になれた中級者達のオレンジ

チームのイカ達がナワバリバトルを行おうとしていた。
ナワバリバトルは4対4のチームに分かれて、マップ中にインクを塗っていき、多く塗られているチームの勝利という、陣取り合戦のようなシンプルなバトルだ。
このナワバリバトル、基本は4対4なのだが、悲しい事に、たまにこういう出来事がある。
「はぁ!?俺達よりランクの高いにスカウトされたからチームを抜けるって!?」
そう、1人チームから離脱してしまい、3対4になってしまう事があるのだ。
こうなると3人チームのイカ達は、抜けた1人の分もマップを塗っていかなければならない。
余程の上級者であれば、1人位の穴埋めは出来るが、そこまで出来るイカはそう多くない。なので必然的に負け試合になってしまう。
「ええ!?どうするんですかこれ!」
「絶望……」
3対4の3の方になってしまったのは、紫チームの方だった。
「あのクソ野郎…とにかく、相手に迷惑掛ける訳にもいかないからやるぞ!」
そしてナワバリバトルが始まると、我先にと1人のボーイが飛び出した。
スプラローラーを持ったボーイが地面を塗りながら突撃すると、後からわかばシュー

ター?を持ったガールとロングブラスターネクロを持ったもう1人のガールが後に続いた。
「待ってください!確かに迷惑掛かると思いますけど説明すれば許してもらえるかもしれないじゃないですか!?」
しかし、わかばの声はローラーには届いておらず、ただひたすらに地面を塗り進んで行ってしまった。
「ローラー…聞いてない…」
1人少ないながらもインクを塗っていくが、徐々に押されていき、残り1分まで迫っくると、相手のバレルスピナーを持ったボーイがわかばを持ったガールをインクの濡れない壁まで追い詰めていた。
「さて…見たところ、どうやら1人居ないみたいで何かあったみたいだな…」
スピナーのチャージを始めると、ジリジリとわかばに近づいて来る。
「さしずめ、逃げられたかトイレで遅れたか……悪いが、勝負なんでトドメ刺させてもらうぞ」
「そ…そんな……」
わかばはどうにかこの状況を脱する方法はないか模索するが、サブウェポンであるスプラッシュボムを使おうにもタンクの中は空になっていて、足元はオレンジ色のインク

でセンプクする事すらできなくなっていた。
ローラーとネクロは何とか地道に塗って行ってるが、わかばがやられた瞬間、一気に2人がやられ、負けが確定してしまう。
オレンジ色のインクに座り込んでしまい、万事休すかと思わず目を瞑ってしまった。
そして、相手のスピナーのチャージを終え、トリガーから指が離された。

その時だった。
どこからともなくイカが飛んで来たと思いきや、金属がいきなり潰れたような音がし、スピナーにクツの跡が付けられていた。
「なっ……!?こいつ…どっから飛んで来た!?」
わかばは何が起きたのか、ゆっくりと目を開けると、目の前には見た事のない髪型をした、見知らぬガールが立っていた。

うわぁあああああああああ!!どうやって着地するのぉぉおおおおお!!

私が飛んだジャンプポイントは、ゲームではそのままハイカラシティに向かって飛んで行くはずだったが、どうやらある程度は自分で意識しながら飛ばないといけないらしく、ハイカラシティから少し離れた場所に向かって落下して行っていた。

そして地面が近づいてきた瞬間、体が勝手に綺麗に着地しようと体を捻りながら足を地面に向けた。

おぉ!これなら安心だと思い、勢いよく着地するが、着地した瞬間、鉄が潰れたような鈍い音がし、思わず下を見ると、バレルスピナーの先の部分に着地してしまっていた。

急いでスピナーの上から飛び降りると、そこはデカライン高架下で、周りではナワバリバトルが起きている事を確認する事ができた。

目の前には、私が潰してしまったバレルスピナーの持ち主だと思われるオレンジ色のボーイが驚いた顔で立っていて、そして後ろにはわかばシューターを持った紫色のガールが震えていた。
「なっ……!?こいつ…どっから飛んで来た!?」
何処からともなく飛んできた私に驚いたボーイが思わず声を漏らした。
「こいつが消えていた4人目か…!」
そう言いながらこちらにバレルスピナーの銃口を向けなら再びチャージを始めた。
すると、殺られると思い、思わずオクタシューターの銃口をスピナーに向けてトリガーを引いてしまった。
「…ッ!しまっ…!」
無数に射出された紫インクに当たったスピナーはやられてしまい、紫インクを周りに撒き散らすと、リスポーン地点に戻って行った。
何とか殺られず済んだと安心していると、後ろに座り込んでいたガールがコチラに話しかけてきた。
「あ……あの…貴女は…」
あぁ…私?一瞬質問の意味が分からなかったが、とりあえず話してみようと声を掛けてみた。

「ワタ…シ……ナマ……エ…？」
「え……？何ですか……？」
どうやらイカ語を聞いて理解するのは普通に出来るみたいだけど、どうやらイカ語を話すのはどうも苦手みたい。どんなに流暢に話そうとしてもカタコトでしか話す事しかできない。
すると、座り込んでいたわかばが震えながらも私の顔を見ると、衝撃的な言葉がその口から出てきた。
「…あっ…あの…！もし良ければ…残り時間…手伝ってくれませんか！」
「!?」
本気なの!?会って間もないのに私にナワバリバトルを手伝って欲しいと…!?
けど……服装やブキを見る限り、どうやら初心者みたいで……か弱いガールの顔を見ていたら、ますます見捨てる訳にも行かなくなってくる……
「……リョウ…カイ…」
（あぁ…もう…言っちゃったよこのタコ……）
思わず後先考えずに答えしてまうと、オクタシューターを撃ちながら敵陣地へと進んで行った。

「なっ…! 誰だ!?あのガール…!」
「一応…味方……?」
敵チームに苦戦しながらもローラーとネクロが塗っていくと、オレンジ色のインクの中から、ローラーに向かって泳いでいく跡がネクロの視界に入った。
「ローラー…! 横のインク…!」
「横のインク…?」
すると、インクの中から勢いよくカーボンローラーを構えたガールが飛び出して来た。
「隙ありぃ!」
「回避…間に合わない…!」
振り下ろされるカーボンローラーを避けようと、後ろに下がる。
すると、ガールに向かってキューバンボムが勢いよく飛んで来た。
「むぐぅ!?」
思わず回避せずにガールの方を見てみると、ガールの顔に命中し、離れないままくっ

ついてしまっていた。
「ちょっと!ヤバいって!誰かこれ取って!」
しかし悲しい事に、外れる前に爆発してしまい、かなりの量の紫インクを辺りに散らばしていった。
(どうやら私が投げたキューバンボムがクリーンヒットしたみたいね…)
爆発した後に後ろから追い付くと、どうやら無意識のうちに助けていたようだ。
「…ダイ…ジョウブ…カシ…ラ……」
「あ…あぁ…大丈夫だ…」
「ナラ……急ギ…マショ…」
「あっ!ちょっと…!」

試合終了の笛が鳴り響くと、無事に試合を終え、ギリギリ勝利する事ができた。
初めてのナワバリバトルでかなり激しいバトルを繰り広げたが、現実世界では味わえ

ない程自由に体を動かせ、イカを倒してインクを塗っていく楽しさが病みつきになる面白さだった。

さて……後はバレないようにこっそり抜け出そうと紫チームのイカ達から離れて行かないと…

すると、去ろうとする私の姿をリーダーと思われるローラーを持ったボーイが見掛けると、私に声を掛けてきた。

「あの!ガールさん!」

「!?……ドウ…シタ…?」

「俺達の事を助けて頂き、ありがとうございます!お陰で何とか勝つことが出来ました!」

続けて、さっきのわかばのガールと、ネクロを持ったもう1人のガールが私の前にやって来た。

「私からも…!ありがとうございます…!」

「感謝…」

と言われても…スーパージャンプをミスった挙句、相手のバレルスピナーを踏み付けてしまっただけ何だけどなぁ……

と思いながら話を聞いていると、リーダーの口からとんでもない言葉が出てきた。

「あの…！もし良ければ、俺達パープルチームに入ってくれないか！」
「エッ……」
「え？」
「エ？」
エエエエエエエエエエエエエエエエ!?
何で!?試合に勝手に乱入してきた不審者なのに何で私をチームに参加しないか聞いてきてるの!?
「ロッ…ローラーさん！私が言えた事じゃないですけど、いくら何でもいきなり過ぎです！まだ出会って5分も経ってないんですよ!?」
「圧倒的論外…」
「わ、分かってる！分かってる！理由をちゃんと説明するから！」
あまりの非常識さにガール2人に責められていると、リーダーらしきボーイが訳を話してきた。

どうやら、少し腕が立つメンバーが1人居たのだが、上位ランクのイカ達にスカウトされてしまい、ナワバリバトルが始まる寸前にチームを抜けてしまったらしい。
苦戦しながらエリアを塗っていると、わかばとスピナーを持った敵のボーイの前に、私という名の救世主が現れ、自分達を助けてくれた私にどうしてもチームに入ってもらおうとした結果が、さっきの急な誘いだそうな。
確かに、いきなり誘われて驚きはしたが、正直に言うと、今の私にとって願ったり叶ったりだった。
このＳｐｌａｔｏｏｎの世界を詳しくしるのにも、ナワバリバトルに参加するにも、交流を深めたイカがいると、何かと便利だからだ。
なので……
「ヨロ……シク…」
私は迷わず手を差し伸べた。
「ほ…本当に良いのか…!?」
「私デ……良ケレ…バ…」
「ありがとう…! 俺はローラー、このパープルチームのリーダーをさせてもらってる。これからよろしく頼む…! ほら、２人も自己紹介して…!」

すると、ローラーがガール２人を前に出すと、２人の自己紹介をさせた。
「は、はい！わかばと申します！最近やって来たばかりで初心者ですが、よろしくお願いします……！」
「ネクロ……イカ、よろしく…」
「…フフフ……ヨロシク…ネ…」
こうして、私は頼りになる仲間を見つけ、Ｓｐｌａｔｏｏｎの世界のイカ…いや…タコとしての第１歩を踏み出したのだった。

……これから先に、あんな事が起こるとも知らないで…

「…ホタルちゃん…やっぱり…アレ……!」
「…間違いない……」
「「オクタリアンの突撃兵…!!」」

続く……?

2　ヒーローから狙われるタコ

どうも、タコゾネスになっていた人です。
目が覚めたらタコゾネスになっていた挙句、行き当たりばったりでイカ達のチームの1人になってしまいました。
まぁ私がＯＫ出したんですけど……
で、今は何をしているかと言うと……
「「カンパーイ!!」」
私の加入祝いに、アロワナモールのフードコートで歓迎会を行っていた。
目の前には、容器から２０ｃｍもはみ出てる山盛りポテトがあり、アメリカ人位しか頼まないだろと思う程の量だった。
「……くぅ～!!やっぱりバトルの後のコーラは最高だな!」
「私はフルーツのジュースが好きですね…♪」
「烏龍茶……美味い…」
「ネクロの好きな飲み物…渋くない？」
私はガッツリお酒を飲める歳なのだが、彼らと同じくソフトドリンクを飲んでいた。

彼らインクリングは１４歳でこのような姿になる。
つまり未成年なのでＮＧです……この世界に未成年飲酒の法律があるかは知らないけど。
すると、私のチームのリーダーであるローラーがポテトをつまみながら私に声を掛けてきた。
「ところで、まだ名前を聞いて無かったけど、名前はなんて言うんだ？」
「…ナ……マエ…？」
……しまった…ここの世界に来て、自分の名前の事を考えるのをすっかり忘れていた…
人間の頃の名前を答えるべきか…いや記憶飛んでしまったからないじゃん…
普通にタコにするか……いや、いくら享楽的で単細胞って呼ばれているからってタコって名乗った暁には変な奴扱いされてしまう…
一応タコマスクってガスマスクのギアがあるけど…
いや待てよ…なら英語に変えればいいんじゃないか…？
確かタコは英語で…Ｏｃｔｏｐｕｓ（オクトパス）…なら最初の３文字で…
「…オクト……」
「オクトか……いい名前だな！」

良かった…セーフ判定貰えた…あのアイドル２人組みたいにイカの種類の名前にしなくても全然大丈夫みたい…

「これからよろしくな、オクト」

「……ヨロシク…」

ふぅ…これならバレる事は無いかな…

…今思えば、大ナワバリバトルから１００年経っているんだ。

イカ達からタコの存在なんて覚えられてないんだから、他のイカから見たら変わった髪型をした人ぐらいの認識しかないのかな？

「あの、少しいいですか？」

と思った矢先、わかばから質問の声が挙がった。

「オクトさんの付けてるそのアタマのギア…初めて見たんですが…」

「未確認…」

しまった……このギア、タコゾネス以外では主人公しか付けてないんだった…

しかもスーパージャンプした時ハイカラシティチラッと見えたけど…イカスツリーにオオデンチナマズが居なかったんだよね…

「ちょっと見せてくれませんか…？」

あぁ…終わったかも……私の物語、早くもイカ達にやられて最終回迎えるかも…

深海提督先生の次回作をご期待下さいかもしれない…
いや…一応非売品だって言い訳すれば…
そう思いながら、私はタコゾネススコープを外した。
「……ハイ」
わかばに渡そうと手を伸ばすと、何故か3人が静まり、驚いた顔をしていた。
「……？ドウ…シタ…？」
声を掛けた瞬間、3人はハッとして顔で我に返り、3人が後ろを向きながらヒソヒソと話し始めた。
「なぁ、オクトの素顔…可愛くないか…？」
「激同…」
「なんというか…大人の魅力を感じる可愛さがあります…！」
ごめん…小声のつもりだろうけど…ガッツリ聞こえてるよ…君たち…
「……アノ…本当ニ…ドウ…シタノ…？」
すると、慌ただしく3人とも前に振り返った。
「なっ…何でもないです…！」
「あぁ…本当に何でもないからな」
「心配無用…」

「ソレナラ…イイ…」

「それじゃ、また明日な！」
「さようなら～」
「さらば……」
歓迎会を終え、アロワナモールで別れると、夜中の２２時になっていた。
これなら生きていけるなと思ったが、問題が１つ残っていた。
家をどうするかだ。
昼にしたナワバリバトルで貰えたお金は少しあるが、これではホテルに泊まる事すら出来ない。

一応、行く当てが無いことはないので、私はハイカラシティに向かって行った。
行先はと言うと、オクタリアンの住む地下の世界へ繋がるヤカンがあるタコツボバレーの事である。
あの老人イカが居るかも知れないが、そこにしか行く当てが無いので、渋々タコツボバレーに繋がるマンホールへ向かう事になっていた。
そしてハイカラシティにたどり着くと、店は閉まっていて、イカっ子一人居ないので、とても静まり返っていた。
どうやらイカ達はフェスの時以外は家で過ごしているみたいだ…
ただ1つ、気になる事があるとすれば……紫色と黄緑色のインクで所々塗られている事である。
そしておまけの1つに、私の頭に黄緑色のレーザーポインターが当たっている事でもある。

「あっ、しまった…イカリングでオクトの友達登録するの忘れてた……」
「どうしますか？明日の集合場所で登録しますか？」
「いや、確かハイカラシティ側に向かったはずだから追い掛ける」
「了解…」
「気を付けて下さいね？最近不審者が出てるみたいですから！」

「……危ナ……カッタ…」
何処からともなく、一直線に黄緑色のインクが勢いよくこちらに飛んできたのだ。

気を許す間もなく後ろの紫色のインクから1人のイカが全速力で向かってくる。
すると、紫色のインクから勢いよく飛び出し、ヒーローローラーを振り下ろそうとするイカが出てきた。
「これでも食らえー!!」
しかし私も紫色のインクなので、飛び出してきたイカが塗ったインクに潜り、飛び出してきたイカの後ろに回り込んだ。
「やばっ…!ぐえっ!!」
勢いよく飛び出したイカは、ローラーの重さでバランスを崩し、顔から地面にぶつかってしまった。
「イテテ……あっ、サングラスサングラス…」
「……動クナ…ユックリ…コッチヲ向ケ…」
「あっ……」
足をプルプルさせながらこちらを振り向くと、サングラスにニット帽を被ったガールだった。
Ｓｐｌａｔｏｏｎ大好きっ子の皆さんならもう分かったでしょう、ローラー好きでサングラスとニット帽を被った人物は1人しか居ないですからね。
ＮＥＷ!カラストンビ部隊隊員のいち…

「1号からシューターを下ろしな…オクタリアンの突撃兵…」
「……」
しまった……完全にやられた……
バトルドージョー前の高台からヒーローチャージャーで狙っていたのは、マスクとキャップを被ったガール、ＮＥＷ！カラストンビ部隊隊員の2号だった。
「ゆっくり足元に置いて、妙な真似をしたら…撃つ…」
「……」
キューバンボムを置こうにも、起爆には時間が掛かるし、何より相手はかなりの腕前のチャージャー…頭を撃ち抜かれてお陀仏だ…
ここは素直に置いときますか…
「……置イタ…ゾ…」
「…1号、ブキを取ろうしたら、すぐさまローラー降って」
「了解っ…！」
高台から2号が降りてくると、2人はジリジリと私を端へと追い込んでいく。
直ぐに撃たない事を考えるに…これから尋問されるんだろうなぁ…まぁ…内容は何となく分かるけど…
「さて…なんでオクタリアンがハイカラシティをウロウロしているのか…気になるけど

…まずは1つ聞かせてもらうよ…」
　すると、ローラーを首元近くまで寄せられると、2人が私に問いただしてきた。
「「オオデンチナマズは何処に居る」」

「えっと…確かコッチだったような…」
　街灯しか明かりがない中、昼間とは比べ物にならない程静かなハイカラシティにたどり着くと、何やら様子がおかしい。
　様子のおかしさに物影に隠れながら進んで行くと、辺りが黄緑色と紫色のインクで塗

られていて、その奥にはオクトの姿があった。
（やっぱりここだったか…）
「おーいっ……!?」
物陰から出て声を掛けようとした瞬間、どこからともなく黄緑色のインクがオクト目掛けて飛んできた。
しかしオクトは間一髪で回避すると、今度はローラーを振り下ろしてきたガールが現れ、オクトに襲いかかっていた。
すると、オクトを狙っているあのガールが、わかばの言っていた不審者じゃないかと思い始める。
そうと分かると、加勢しようとローラーを握り締め、突撃しようとするが、一瞬にしてオクトが不審者を追い詰めていた。
これなら大丈夫だなと思った矢先、何処からか別のガールの声が聞こえ、オクトの頭に射線が当てられていた。
「1号からシューターを下ろしな…オクタリアンの突撃兵…」
聞こえてくる声に従っていくと、オクトのシューターは手放され、追い詰めていたガールにローラーを近付けられていた。
そしてオクトは2人のイカに追い詰められていくと、何やら尋問されているようだっ

た。
　ここからどうするべきか、誰か助けを呼ぶか…どうにか助ける方法はないかと考えると、1人のガールの持つローラーが振り下ろされそうになっていた。

「……サァ…ネ…」
「しらばっくれないで!あんた達のＵＦＯがオオデンチナマズを連れ去ったのは知ってるんだから!」
　ゲームの通りだったら、タコツボバレー上空を飛んでいるＵＦＯにあるボスヤカンから行ける場所にあるんだけど…
　そこまでゲームと同じという確信がないので、ここは知らないふりをするのが無難だと考えた。
「まぁ1号落ち着いて、答えなくても一応当てはあるんだし、ここで倒しちゃってもいいんだよ?」
「あっ…そっか、なら…この場で倒しちゃおっか!」

すると、1号が大きくヒーローローラーを振り上げてくる。
この後の私はどうなるんだろうか…またリスポーンする事が出来るだろうか…
それが分からない状態で死ぬのは、現実世界で死ぬのと同じ位の恐怖を感じた。
こんな時、ラブコメ漫画みたいに誰か助けに来てくれないだろうか…そんな淡い期待をしながら死を覚悟した。
その時だった。
「動くな!ブキを手放してオクトから離れろ!」
1号と2号の後ろに立っているのは、メガホンレーザーを構えたローラーだった。
「少しでも妙な動きをしてみろ…2人とも吹き飛ばす…!」
「…2号、どうする? 撤退するべき…?」
「だね…1号のサブを変えて持ってきた緊急脱出用のビーコン、置いといて良かった…」
すると、2人はイカの状態になり、どこかへ飛んで行ってしまった。

「チッ…逃げられたか……オクト！大丈夫か!?」
　メガホンレーザーが消えると、急いでコッチに向かって来た。
「ナント…カ…助カッ…タ…」
「気にすんな、リーダーとして、チームのメンバーを助けるのは当然だろ?」
「ソッ…カ……」
　ローラーが照れながら返事をすると、タコゾネススコープを外し始めた。
「…オクト…どうしたんだ?…っ!?」
　何かお礼でもしようかと思い、スコープを外すと、ローラーの事を見つめながらお礼をした。
「ナ…リガ…トウ…ローラー…」
「!?!」
「!?!」
　効果覿面…顔が茹でダコみたいに真っ赤になってる…
　すると、混乱した様子で私に話始めた。
「オ…オクト…！良かったら家に来ないか！」
「エッ……イイノ…カシラ…?」
「あっ、あぁ！また狙われたら危ないからな！」

恐らくこれは正気じゃないな…けど…これはこれで都合がいいので…

「??? レジャア……オ願イ…スルワネ…」

「!!!」

すると、激しく動揺したのか、プシューッ!!と頭から蒸気を発しながら倒れてしまった。

「オヤオヤ……アリガト…ネ…ローラー…」

倒れたローラーをおぶり、ハイカラシティを離れると、オクトはローラーの家へと向かって行ったのだった。

続く……?

3　ボーイをからかうタコ

どうも、タコゾネスになっていた人こと、オクトです。
私が今背負っているのは、私のチームのリーダーのローラーです。
何があったのかは前回を見てもらうとして、今はローラーが住んでいるヒラメが丘団地に向かってる所です。
1号と2号の追撃が来ないか心配していたが、どうやらそのまま撤退してくれたようだ。
にしても…ハイカラシティ内ではブキの使用を禁止してるくせに良くもまぁ……
1人でぶつぶつ呟いていると、背中にローラーがモゾモゾ動き出した。
「……あれ…俺は…ってオクト!?」
「アッ…気ガ…付イタ…」
すると、慌てた様子で背中から降りた。
「……誰かに俺の姿、見られてないよな…!?」
「今ノ…時間…起キテ…ルノ…私ト…ローラー…」
「まぁそうだけどさ…もし見られたら恥ずかしいだろ!?」

「アア…ナル…ホド…」
そんなこんな話をしている内に、ヒラメが丘団地に到着した。
ローラーが言うには、ここには多くのイカが住んでいて、ハイカラシティに憧れてやって来たイカ達もここで部屋を借りてるらしい。
しかもガス、水道、電気もしっかり設備されて、1ヶ月の家賃が５０００ゲソでときたものだ。
しかも風呂付き。
イカ達はお風呂や水に浸かると溶けるけど…それでも集まる訳だ…
そして、ローラーに案内されると、ローラーの住んでいる部屋に着いた。
「少しごちゃっとしてるが、我慢してくれ」
「問題…ナイ、ボーイラシイ…部屋ダナ…」
テレビの前に小さなテーブルに、ソファー、シングルベッドの側の壁にポスターやフィギュアに靴等が置かれていた。
イカ達は適当だけど物持ちはいいらしく、記念物や靴等をディスプレイとして保管するらしい。
キッチンは冷蔵庫や炊飯器、電子レンジやトースターが置かれていて、二口コンロの側に電気ケトルや調味料と、一人暮らしにしてはかなり充実していた。

「一人暮ラシ…ニシテハ……色々…充実シテイル…ナ」
「あぁ、実は数ヶ月前に両親に頼み込んで上京して来たんだ。そしたら両親から仕送りが毎月届いてな…」
「…ナルホド…イイ…両親…ダナ…」
　そんな話をしていると、何か思い出したようにポケットから何かを取り出した。
「そういえばオクトと連絡先交換するの忘れてたからな、オクトはイカフォン持ってるか？」
　ナワバリバトルをするにも、ガチマッチをするにも、友達とワイワイ楽しむにも、４人居ないと始まらない。
　そんな問題を解決するのがこのイカフォンである。
　イカフォンは簡単に言うとＳｐｌａｔｏｏｎの世界のスマホの事です。
　私のポケットの中にも入っていて、何か情報が入ってないか調べた所……残念ながら新品でした……
　嬉しいような…悲しいような…
「アァ…持ッテル……イカリング…デ…登録…スルノ…カ？」
　イカリングは、Ｓｐｌａｔｏｏｎの世界で配信されている無料のアプリで、友達とのメールや電話が無料で出来るので、世界中のイキモノが使ってる程の人気のアプリであ

る。

　イカリング自体は現実でも使われていたサイトだったが、Ｓｐｌａｔｏｏｎ２が出てからは新たに出たイカリング２と交代するようにサービス終了した。

　まさかこんな形でまた使う事になるとは思わなかった…

「…よしっ、これで大丈夫だな」

「アリガ…トウ…」

「……ファァァ……ッ！……ココハ…」

　ローラーの家に案内されてから数時間後、ローラーに敷いてもらった布団から目を覚

ますと、カーテンから朝日が差し込んでいた。
（……やっぱり夢じゃなかったか～…）
寝るまでは本当は全部夢オチなんじゃないかと思っていたが、どうやら夢じゃないらしいです。
目を擦りながらイカフォンを確認すると、時刻は午前６：３０になっていた。
記憶が正しければ人間だった頃は普通に８時半までぐっすり寝てたと思う……
タコ達は勤勉で真面目って言われているから朝もキッチンと起きたのかも…
逆にイカ達は享楽的だからか、早起きはしないらしい……やっぱり私…タコじゃなくてイカになるべきだったんじゃ…
とりあえず……ローラーにお礼を兼ねて、朝食でも作ってあげますか…

「…んっ…ふぁぁぁ……おはようオクト…あれ…オクト？」
ローラーが目を覚ますと、オクトが眠っていた敷布団に姿が無かった。
すると、何やらザクザク、コツコツとキッチンから音が聞こえてきた。次いでに何や

ら美味しそうな匂いまでしてきた。
　キッチンを覗いて見ると、プロテクターの上にエプロンを着けながら何か作っていたオクトの姿があった。
「アッ……ローラー…オハヨウ…朝食…出来タカラ…」
　ローラーをテーブル前に座らせると、オクトがご飯、味噌汁、卵焼きに焼き鮭、えんぺらレモンの皮の浅漬けを載せたお盆をテーブルに置いた。
「え……これ…いいのか…?」
「泊メテ…クレタ…オ礼…」
「あ…ありがとう……」

「ふう……誰かの手料理を食べるのは…久しぶりだったな…」
　あまりに美味しかったのか、物の１０分で平らげてしまった。
「ご馳走様…ありがとなオクト、美味しかったぜ」
「ソレハヨカ…ッタ…」

食べ終わった皿を回収しながら皿を洗い始めると、ローラーの携帯に電話が掛かってきた。
「おっ、ネクロ、今日もナワバリバトルか？…了解、それじゃあロビー集合な」
「今日モ…ヤルノカ？」
「あぁ、今日は練習も兼ねてな。チームとの連携を取るためには大切だろ？」
「ソウ…ネ……ンッ？」
すると、ローラーの頬を見ると、米粒が1粒付いていた。
ローラーは気付いてる様子は無く、キョトンと私の事を見ていた。
ここは普通に教えるのではなく、ちょっとからかってみる事にした。
「ん？オクト、どうした？」
「ジット…シテ…」
「え？」
するとスコープを外し、ローラーにゆっくりと近付くと、ローラーの頬にゆっくりと顔を近づける。
「オ、オクト!?」
慌てながら顔を赤らめながら同様すると、オクトの鼻息が頬に当たる程近くに顔を近付けていた。

「ホラ……オ弁当…付イテタ…」
「……」
「……ローラー…？」
急に静かになったローラーの顔を見てみると、顔から蒸気を発しながらその場に倒れてしまった。
「アララ……」

待ち合わせ場所のロビーに着くと、先にわかばとネクロが着いていた。
「あっ、ローラーさんとオクトさん、おはようございます！」

「オハ…ヨウ…」
「あれ……ローラーさん、なんで顔が赤いのですか？」
「アァ……色々…アッタ…」
「満身創痍…」
「う…うるさい…！」
「とりあえず、今日も練習頑張りましょう！」
「御意…」
　そして4人がロビーの中へと入っていくと、スタジオで休憩している2人のガール、シオカラーズがその姿を観ていた。
「あのオクタリアン！なんで他のイカと活動してるの!?」
「洗脳してんじゃね？もしくはイカとして紛れてるつもりだったり…」
「何にしても！絶対何か企んでる！」
「まぁアオリちゃん、暫くは様子を見よ」
「ぐぬぬぬ……あれ、スタッフさんどうしました？え!?もうハイカラニュース始まるって!?」
「やば……時間見てなかった…」
　こうして2人は、地上に現れたオクタリアン事オクトを監視しながらも、今日もアイ

ドルとして活動していくのであった。

続く……？

4　お忍びの将軍様

「ふぅ…お疲れ様オクト、ナイスショットだったぜ」
「アァ…ローラーモ…ヨカッタワヨ…」
　ローラーと色々あった後、最初は茹で上がったままだったけど、相手のトルネードを直撃したのがいい刺激だったのか、すっかり元通りに。
「そういえばローラーさん、1つ聞きたい事があるんですけど…」
「茹で上がっていた事に関しては聞かないでくれ…」
「あっはい」
「そんじゃ、今日は解散って事で」
「お疲れ…」

　現在時刻は10時半、流行の街ハイカラシティも徐々に賑わい始め、イカ達の姿も増えてきていた。

このハイカラシティに、１４　１５の歳になりたての若者たちが大勢来るのにも理由がある。

日々ナワバリバトルに明け暮れ、流行に敏感なイカ達は、この街にあるファッションビルに足を運び、常に最新のファッションを模索しているのだ。

そのファッションビルの名は「ブイヤベース」

ブイヤベースは４つの異なる店が連なり、それぞれの店にイカとは違う海洋生物が店員をしている。

ブキ屋である「カンブリアームズ」を除く3つの店舗の品は日替わりで品が入れ替わっていき、もし今日このギアを買わなかったら二度と買えないかも知れない。

イカ達は期間限定や時限的な商品に弱く、イカによってはそのギアを持っているだけでステータスになる程らしい。

そんなイカ達の中には、珍しいギアがあればそのイカから無理矢理奪うようなやつもたまにいるらしい。

簡単に言えばヤンキーのカツアゲのような事をする不良イカもこの世界にはいるようだ。

（まぁ、私のも非売品だから何時狙われるか分かんないだけどね…）

そう思いながらもヒラメが丘団地に向かっていると、何やら路地裏から何やら騒がし

い。
何かあったんだろうかと、バトル道場近くの橋から覗いてみると、3人の不良らしい服装のイカ達が行き止まりで立ち止まっている1人のイカに迫っていた。
話をすればなんとやら、どうやらこれがギアを奪っているヤンキーらしい。
それなら被害者のイカは何を着ているのかを見てみる。
紫の生地に緑色の和風な模様が描かれた和服に、靴は普通の下駄、そして頭には将軍が被るような兜を身に付けていた。
「おら、酷い目に遭いたくないないならその珍しいギアをさっさと寄越すんだな！」
「3対1でかなうわけないんだからさっさと渡しちゃいなよw」
「それでも嫌なら、気絶するまで相手してやって身ぐるみ全部奪ってやるけどな」
（これはマズイ…私ですら見た事のない服装してる…こんなギア攻略本には載ってなかったわよ…）
そんな事を考えていると、ヤンキーが徐々に詰めていき、追い詰められたイカは後退り出来なくなってしまった。
「俺達は優しいからな、スリーカウントしてやるから、それまでにどうするか決めてもらおうか」
そしてヤンキーの1人が無情にもスリーカウントを始めるが、追い詰められたイカは

顔を下げたまま動かない。
「さ～ん…に～…いーち……」
「ヤメタラ…ドウカシラ…ミットモナイ…」
　私は思わず橋から飛び降り、めんどくさい事に手を出してしまった。
「あぁ？なんか言ったかこの野郎…」
「ミットモナイ…聞コエナカッタ…カシラ？」
「っ！テメェ…どうやらコイツと同じように痛い目に逢いたいらしいな…」
「あーあ…エリートを怒らしちゃったよ」
「これは2人とも終わったw」
　エリートと呼ばれている1人のボーイがラピッドブラスターエリートを取り出し
「お前のギアも見た事ねぇ物ばかりだからな…お前のギアを身ぐるみ剥がしてやる…」
　そして銃口をこちらに向けると、赤く茹で上がったような顔をしながらトリガーに指を掛けた。
　そんな時だった。
「ナワバリバトルの試合を、イカ共3人に申し込む」

終始無言だったイカがいきなり声を出したのだ。
「な!?」
あまりの唐突さに、エリートが持っていたラピッドブラスターの銃口をイカに向けると、イカはホクサイを肩に背負いながらエリートの元へと歩いて行く。
「イカ達の間ではナワバリバトルが流行っているようじゃないか。それならお前ら3人に対してオレとその部下、後ろに居るガールのチームで勝負するのはどうだ?」
「ほぉ…俺達に勝負を仕掛けるとはな…いい度胸してんじゃねぇか…それなら、俺達が勝ったらお前らのギアを全部寄越せ」
「良いだろう、もしも俺達が勝ったら……そこのガールの言う事に従うことだな」
そう言いながら私に指を刺すと、エリートは「決まりだ」と言いながらブキをしまい始め、
「今夜２０時、ネギトロ炭鉱に来い。もし怖気付いて逃げるようなことをしたら…覚悟しろよ」
と言って、仲間のイカ2人を連れて何処かへ去って行った。
「……ナントカ…去ッテ行ッタ…アナタ…大丈夫カシラ…?」
ヤンキー3人が去って行くのを見て溜め息をすると、追い詰められていたイカの心配をすると、さっきのように普通に話し始めた。

「あぁ…あんなイカ共、イカソーメンにしてやっても良かったが、あの状況なら穏便にことを進められなかったからな…借りができたな、イカのガール…いや…」

すると、ズレていた帽子を直すように兜を動かし、濁らせた言葉を言い直すように再び話し始めると、予想だにしていなかった返事が返ってきたのだった。

「我ラオクタリアンノ突撃兵、タコゾネスヨ…」

動かした兜から髪が生えてきたと思ったら、生えてきたのはイカ足ではなく、赤紫のタコ足だった。

しかしそんな事は気にしてはいなかった。

私はあのイカ…いや、イカの姿をした何かが私に話した言葉に気を取られたのだった。

「何故……アナタガ『タコノ言葉』ヲ話セルンダ…!」

あまりに急な出来事で、イカの言葉ではなく、タコの言葉で話してしまうと、私の言葉が通じるように返事をしてきたのだった。

「ギギ…簡単ナ事ダ……何故ナラコノオレガ…オクタリアンヲ束ネル者デアリ、イカノ世界カラオオデンチナマズヲ奪ッタ張本人デアル、ＤＪタコワサ将軍ダカラダ…!」

時が過ぎてお昼時、私はコンビニで買ったお昼ご飯をデカライン高架下でナワバリバトルをしてるイカ達を眺めながら食べていた…隣にいるラスボスと共に…

正確に言えば、コンビニで（ラスボスに奢ってもらって）買ったお昼ご飯である。

「ソレニシテモ…ドウシテ将軍様ガイカノ居ル地上世界ニ居ルノデスカ…？」

「ソレヲ言ウナラオ前モドウシテコンナ地上ニ居ルノダ、タコゾネスヨ」

「私ノ事ハオクトデイイデスヨ、ソレニツイテハカクカクシカジカデシテネ…敵情視察トデモ思ッテオイテクダサイ」

そう言いながらフルーツサンドを口の中に頬張ると、タコワサ将軍はベンチにもたれかかりながら答えた。

「オレモ最初ハタダノ敵情視察ダッタ…オオデンチナマズヲ奪ワレテイテ、一体イカ達ハドンナ状況ニナッテイルカヲ確認シニナ…」

「アッ……」

私はその時点で何となく察してしまった。

「古来ヨリ貴重ナエネルギー源トシテ重宝サレテキタオオデンチナマズヲ奪ッタノニモ

関ワラズ、何ノ関心モ抱カナイデナワバリバトルヲシテイル…ナンデ今マデアンナイカ達ニ負ケテキタノカ、疑問ニ思ッテナ…」
「１００年前ノイカ達トハ違ウノデスヨ…今ノ若イイカ達ニハタコノ存在ガ忘レサラレテイマスカラネ…」
「ナルホド、ダカラアンナ調子ニ乗ッタイカ達ガイルノカ……ソレナラ、俄然アノイカ共ヲ完封ナキマデニ叩キ潰ス気ニナルッテモノダ。腑抜ケタイカ共ニオ灸ヲ据エテヤラントナ」
　そう言って食べていたおにぎりを全て食べると、ベンチから立ち上がった。
「オクトヨ、今カラネギトロ炭鉱ニ向カウゾ。アイツラヲ二度トナワバリバトルヲ出来ナイ体ニシテヤル」
「ワ…ワカリマシタ……」
　急いでサンドイッチを食べ終えると、将軍の後を追い掛けて行った。
「サテ、部下ニハ既ニネギトロ炭鉱ニ来ルヨウニ伝エテオイタ。即興ノチームニナルガ大丈夫ダロウナ?」
「エェ…ソレハ大丈夫デスケド、将軍様ハネギトロ炭鉱ノ場所ッテ分カルンデスカ?」
「マァナ、昼ノネギトロ炭鉱ニ来ルノハ久シブリダガナ…」
「昼ノ?ソノ言イ方ダト、夜ニハ良ク来テルミタイナ意味ニ聞コエマスケド…」

「アァ、ソノ通リダガ？」

この時私は思い出してしまった…大ナワバリバトルが終わった後も、ネギトロ炭鉱への立ち入り禁止が続いている理由を…

続く